

草土文化

野の花のようになりたい
まずしくてもやさしく生きよう

吉田邦子

夜空の星と 野の花と

恋をし、家庭をつくり、子どもを生み……

若くこぼれるようなその笑顔はガンによって奪われた
十年間にわたる邦子の日記は哀しい一つの女の歴史



夜空の星と野の花と

一九七九年六月二五日 第一刷発行 ©

著 者 吉田 邦子

発行者 田 辺 徹

東京都千代田区五番町一〇の六

発行所 株式会社 草 土 文 化

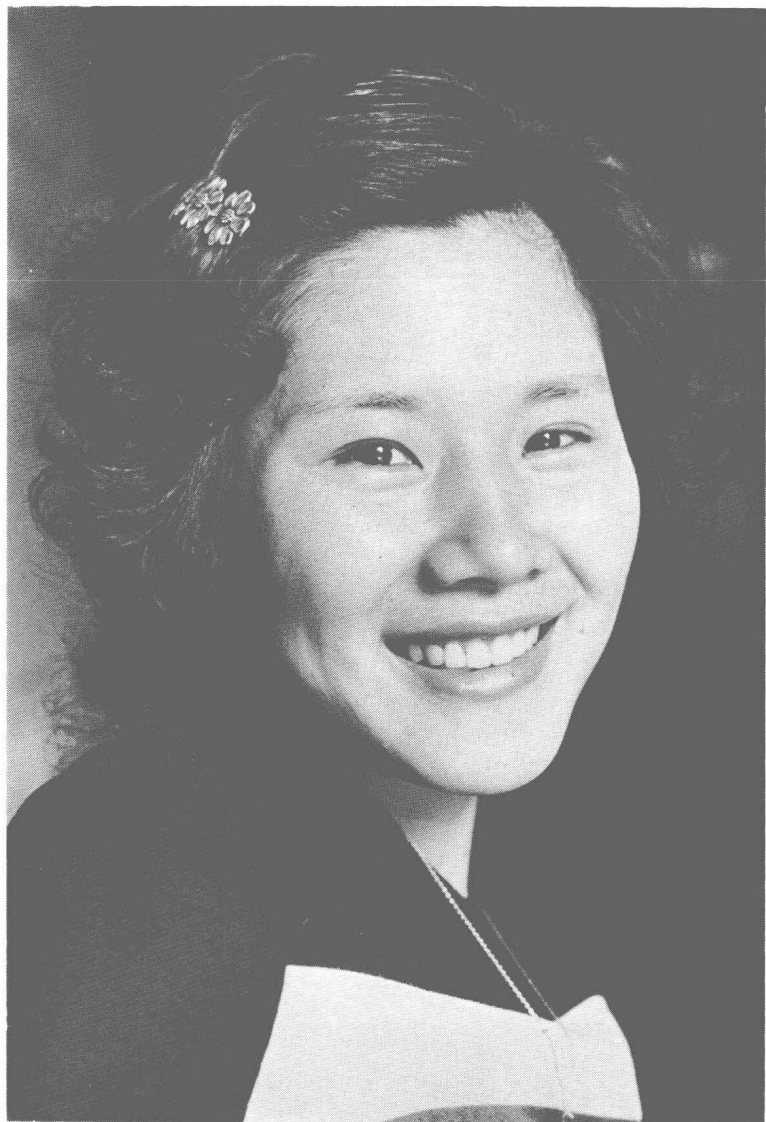
印刷・大永舎／製本・昇栄社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

夜空の星と野の花と
吉田邦子



草土文化



ありし日の邦子



胃癌手術のため入院した病室で





胃癌手術を前にしての邦子

まえがき

この本のまえがきを記すべき人は、もういない。いや、いないからこそ、この本が世の中に出たともいえる。

若くして癌に奪われた命とひきかえのように、彼女は十数冊の日記と日々のメモを手帳に残した。

そこには、彼女の心の軌跡と暮らしのありようが、細かな字で克明に記されていて、読むものをとらえてはなさない。三十そこそこの肉体が癌で奪われたということはそれだけで痛ましく、口惜しく、人々の心をかきむしってあまりある事実である。だがその事実を越えて訴えかける何かがこの日記にはあった。

複雑な時代を短かったが必死に生きた魂の記録。人々の目にふれることなど予知せず、思いのままをつづっているがゆえに、生きることのなんであるかを、問いかけるのである。

彼女がもし生きていたら、あるいはこの本以上のものを世に送り出していたかもしれない。そういう才能の片鱗は見うけられる。しかし、またひたむきに生にたちむかった凝縮された生命であつたからこそこの日記は生まれたともいえる。それをあえて公開することはいまは亡きつづり手に告げて、この本のまえがきとしたい。

一九六五年

三月二日（火）

二十歳……いよいよ私も二十歳になりました。ああ、私も二十年間生きてきたんだなァと思うと、ちょっぴり感激です。でもこれからが本当の人生、新しい気持ちで出発しようという心境です。一日一日を悔いなく、大切に生きましょう。

二十年を振り返ると、いろいろなことがありました。悲しいこと、つらいこと、忘れてしまいたいことも。それらのことは、忘れてしまってもよいと思います。プラスになるような教訓を残しておくならば――。

私はまっすぐに、前向き姿勢で生きるのです。ささやかな力を、社会変革に捧げるために。幸福を、希望を、平和をしっかりとつかむために――。

私は学習します。計画を実行します。自分に素直な人間になります。そして、悔いのない人生を送るために、努力を惜しまないようにしましょう。

三月六日（土）

明子のお見舞に行く。K医大は、ものすごくデラックスな設備を持つ病院だ。何か、違う世界の病院にきたようで、いやな気持だった。でも、ゴチャゴチャと、たくさんある建物を通り抜けるうち、組合のポスターを見つけ、ああこの労働者もたたかっている！という、ジンとしたうれしさがこみあげてきた。

三月八日（月）

久しぶりにというか、珍らしくもいったほうがよいみたい、に、スタッフが四人そろった。病室をきれいにして、清拭をやりながら、患者さんとも少しおしゃべりもできた。でも、こんな日は、また当分めぐってきそうもない。

きょうは国際婦人デー。社会主義の国では、女性がいつにも増して、幸福を味わえる一日なんだろう。日比谷の集会に行くと、病院からは参加者六名だけ、「うちの病院には、婦人が六名しかいないのね」ということになった。でも、女性のコーラス、シユプレヒコールは、とてもキレイ。警察は、女性とみくびってか、バラバラ程度しか出てきていなかった。

リッちゃんが、えんげきのコピーをとっている時、ちょうど彼がきて、話していったそう。もしそうなら、ちゃんと話をしなければ——と。その後電話があつて、きょうあわないかといわれたけれど、木曜日に変更——。

私の今の気持を何て伝えたらよいのだろう。彼があまり私を大切にしてくるので、私が少しわが

ままになつてゐるのかも知れない。

三月十日（水）

明日、みこの所に行こうと思つて、電話すると、「カゼがひどくて、出られない」との返事。彼女は以前から、身体が弱いので気がかりだ。私の元気を少しプレゼントしてあげたいくらい——お見舞に行つてあげたいけれど、行く道、覚えていないからダメ。あとで手紙を書こう。

山梨の二人が、面接にくるのも明日。そして彼と話し合うのも明日。彼が私に、何を聞きたがつてゐるのかよくわかる。でも私は、うまく自分の気持を表現できるだろうか？ いまだかつて、味つたこともない、この複雑で微妙なこの心を。いつか、彼はだまつていても、私のいいたいことはわかるといったけど、きっと全部はわからない。自分自身だって、自分の気持がどう変わるのかわからないのなもの。

でも、おたがい傷つけ合うことのないよう、おたがいの気持を尊重して、話し合う以外に、しょうがないと思う。ごめんなさい、苦しめて——。ニコは、本当にいけない恋人です。恋人らしくない恋人、冷たくて気まぐれで、でも、私だって苦しい。毎晩、決まつてそのことで頭がいっぱいになり眠れないんですもの。今ごろ、彼も、同じように悩んでゐるのだナ—と思うと、自分が憎らしくなります。彼を心から愛せない自分が——。

好きかきらいかと聞かれたら、好き！ と答えられても、惜しみなくさげられる愛情を、生涯持ちつづけられることに確信のない今、今までの悩みを、スッキリ解決させることは、望めないかも知

れない。この苦しみが、何につづくものなのか、当然のものなのか、それとも特異なものなのか、知りたい。四〜五ヵ月もの間、止っていた生理がはじまった。明日は、もしかすると、つらいかもしれない。（＊邦子の愛称、自分でニコとかニコちゃんといっている）

三月二十二日（月）

きょうは、この間書けなかったことをぜひ書いてみたい。まず、十一日は彼と会って話し合い、おたがいにスッキリできたことから――。

会うまで私は、もしかするとこのまま、こわれてしまうのじゃないかと、心配したりしたけれど、彼は、やはり立派だった。もし私が、彼をきらいになったのじゃないかというような質問をされたら、自分の気持をとてそのまま伝えることはできなかったらうけれど、（あまりにも感情的なやりとりになって）落ちついて話し合うことができたし、自分でも、自分の気持というものを、ハッキリつかむことができた。

私は、結婚に踏み切るには、まだ若く未熟すぎるのだ。自分自身にもその気になれないということがあるし、また、今の情勢の中では、結婚すればどうしたって、一人でいる時より活動できなくなるのが目に見えてハッキリしている。私は、まだまだ活動の経験も浅い。それに、これからが肉体的にも、精神的にも、全力をあげて勤務にも活動にも集中し成長できる時なのだ。

この時点で、自分のことだけを考え、あるいは、相手の気持だけに押されて結婚することが、個人にとっても、まわりに対しても、決してプラスにはならないだろうと思う。最近、私って、子どもな

んだなと、思うことがたびたびある。それに気がつくだけ、おとなになったのかも知れないけれども、でも背伸びはしない。一步一步でもいいから着実に前進したいのだ。

彼との話し合いの結果、当面は、結婚ということを早急に考えたりせずに、もっと自然で気楽な交際をしようということになった。彼にとつては、もの足りなく思えることもたくさんあると思うけれど、しかたがない。私より、もっとふさわしい人がいたなら、満足してもらえらるだろうけれど。その日の夜勤はともさわやかな気分分、うとうともできないほどだった。真夜中、その気持を伝えるために、ペンを一心に走らせた。後日、それに対する返事の手紙をもらい、彼への尊敬の念を深めることができたけれど、会う機会をつくれないうちに、きょうまできてしまった。

三月二十五日（木）

きょうは、緊急デモに行った。アメリカ帝国主義は、ついにベトナムで毒ガスまで使うようになった！ 断じて許せない行為ではないか。日本の自民党政府は国会での答弁で、「毒ガスを使用していることなど知らない」というようなそらざらしいことをはいたそうだ。マスコミで、デカデカと報じられているような情勢の中で、よくもまア、とあきれてしまう。

アメリカはますます狂暴さを増してはいるが最後のあがきという感じだ。そしてベトナム人民の敵は、最後の最後、息の根をとめられる瞬間まで、良心を取りもどすことはないであろう。でも、いずれの国においても人民が勝利することは、間違いないことなのだ。歴史に証明されているように。

私は、再びこの恋に悩んでいる。なぜ、すぐにこんな気持におち入ってしまうのだろう。きつと、

私に、恋愛に対する確信が欠けているからに違いない。私が何もいわずに、この恋愛を發展させていったなら、一番幸福だろうに――。でも、妥協や、いい加減な気持のうえにたつて愛情を深めることなどできない。ゆっくりと考えてみたいと思う。

三月三十一日（水）

三月もきょうでおしまい。二十歳をむかえてからの一ヵ月をふり返つて思うのは、自分の弱さということ。私はもう一度学習の二ヵ年計画を立て直さなければと思う。

私に必要な言葉は、“きょうから”という一言。“明日から”“明日から”で今までできてしまったのではないか？ それでは何もできないのだ。私には、もっともっとファイトが必要だ。忍耐力も、創意性も、積極性も、誠実性も、あらゆる力が欠けている。それは、当然なことかも知れない。でも、完全に一つひとつの努力が、足りないのは確かなことだ。

えっちゃんの送別会が終わった。彼女たちのことでは、ずいぶんと、問題を投げかけられ、迷惑をかけられ、そして、学ばされたことだろう。二人の決意を聞いても、その前途を樂觀することは、どうしてもできない。しかし、今さら何というかと、二人の行動をとめることはできないのだから、あぶなげながら、勵ましを送る以外ないだろう。

私は、悲劇が好きじゃない。打算的といわれても、安定性のある幸福がほしい。一時的な幸福なんていやだ。私が、もし不治の病いを患ったら、どんなにつらくても恋愛を捨てよう。盲目的な恋はしたくない。炎のように燃える恋って素敵だけれど、やっぱり、静かでも、永遠に変わらない、深い、

純粹な恋がいい。

その人の一挙一動まで、頭の先からつま先まで、中身はもちろん、外見も、すべてが好きでしかも、いつまでも変わらずに、知れば知るほど好きになる、そんな恋がしたい。子どもっぽいといわれてもいい。本当の恋を知らないといわれてもかまわない。だって、それが私の本当の気持なんだから。

私の今している恋愛は、本当の恋じゃないかも知れない。彼を基本的には尊敬できても、感情的には、好きになれる面もあるのだから——。それを口に出していることはできないし、するべきではないと思う。今のところは、それでも、態度には現われているかも知れないが。

四月十五日（木）

どうやら選挙ムードが出てきた。今の情勢を知れば知るほど、はりきらなくちゃと思う。

私は、自分の心の狭さ、弱さを痛感している。仕事のうえでも、私生活のうえについてもそう思う。でも、矛盾があり問題があるから、発展するのだという理論を信じて、自己改革のため努力してゆこう。

今、林田茂雄の『愛情論』を読んでいる。そのとびらの言葉がとても印象的だ。

「今日を生きるあなたの頬が

何よりも今日のために

明るくがやくように」

この終わりの三行の言葉が好きだ。私たちには、昨日があり今日があり、そして明日がある。昨日